

# イングランドのチャップブックと 近世日本の絵入り本 — *The World Turned Upside Down* と 『無益委記（無題記）』を通して—

大 島 結 生

## 1 はじめに

本論文では、18世紀～19世紀初頭にイギリス（主にイングランド）で流行した、簡素な木版挿絵本であるチャップブックと、江戸の草双紙、とりわけ黄表紙の比較を通して、日英の風刺挿絵について考察する。取り上げる作品は、James Kendrew<sup>1)</sup>、*The World Turned Upside Down, or, No News, and Strange News* (York, 1820頃)と恋川春町『無益委記（無題記）<sup>2)</sup>』（江戸、1781）である。共通するのは、作品を一貫しているナンセンスである。身近な動物や典型的な人物を題材としており、そこには読者層の人々の習慣や共通イメージが大きく投影されている。両作品の挿絵とテキスト、特に、登場キャラクターの表象に着目し、社会背景及び読者層・風刺表現の比較を行いたい。

今回取り上げる Kendrew のチャップブックが出版された19世紀初頭、イングランドを訪れたアメリカ人作家の Washington Irving (1783-1859) は、著書 *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* (1820) の中で、イギリス人の最も顕著な性格的特徴について私見を述べている。それは、卓越したユーモアのセンスであり、特に事物を戯画化する技量に長け、彼らは常にジョークと戯れているというのである。それゆえ、ロンドンのプリントショップへ風刺版画を見に行くことが、イギリス人を理解するための手っ取り早い方法だと、Irving は主張している<sup>3)</sup>。それほど、ナンセンスとユーモアによる風刺のムードが、イングランドの民衆世界を満たしていたのである。荒唐無稽な戯諺を

もって時局風刺を繰り広げる趣向は、黄表紙との大きな共通点と言えるだろう。

チャップブックと草双紙の類似性については、Leon M. Zolbrod<sup>4)</sup> や Laura Moretti<sup>5)</sup> の先行研究の中で、出版産業における重要性や書誌的な特色といった面で類似点が見られることが、短く指摘されている。そこからさらに考察を深め、具体的な風刺内容について比較を行うことで、両者の共通点と相違点を明らかにし、両国における批判精神の在り方を捉えたい。

チャップブックとは、簡素なテキストと木版挿絵で構成された、16～32頁の大衆向けブックレットである。フェアやマーケットで売られた他、チャップマンと呼ばれる行商人（図1）<sup>6)</sup> が、日用雑貨やロンドン土産とともに農村部の各戸にまで売り歩き、広く流布した。通常、安価な紙（灰色）に印刷され、シートのまま売られたが、中産階級の子供向けに、製本されてブックセラーによって売られたものもある。価格は1ペニー程度で、当時の牛乳1パイント（約568ml）の物価に相当した。内容は多岐にわたるが、主に、Histories（伝承物語）、Magic（魔術）、Courtship（求愛）、Social Comment（時事）、Jokes and Jests（滑稽譚）、Practical（実用書）、Rogues and Fools（悪党と道化）、Marital and Extramarital（結婚と不倫）に分類される<sup>7)</sup>。当初、読者は労働者階級の大人が主だったが、19世紀以降、日曜学校の普及とともに子供読者が増え、内容も教訓物へと変化していった。内容の変化に伴い、本の大きさも、郵便葉書程度のサイズ（約15.24cm×10.16cm）から豆本サイズ（約6.35cm×9.14cm）へと変化した<sup>8)</sup>。

なお、チャップブックという言葉が用いられるようになったのは19世紀以降とされており<sup>9)</sup>、それまでは単に、ペニーヒストリーやペニーブックなどと呼ばれていたが、本論文では時代にかかわらずチャップブックという呼称を用いる。また、本来、チャップブックはスコットランドを含む広範な地域で



図1

流布したものであるが、その性格が地域により異なるため、イングランドに限定して取り扱うものとする。

## 2 作品背景

### 2.1 James Kendrew, *The World Turned Upside Down*, York, 1820?

*The World Turned Upside Down*、つまり「さかさまの世界」は、チャップブックの人気タイトルである。ここに載せられた詩の初出は、1646年にロンドンで出版された宗教的パンフレット(図2)で、背景には、王党派と議会派の政治的対立や、国教会と清教徒の宗教的対立といった大きな社会変動があった<sup>10)</sup>。このピューリタン革命から王政復古期(1642-61)には、体制批判を行う印刷物が多く出版され、バラッド、つまり物語詩と挿絵を用いた風刺表現の型が定着していった。以降、*The World Turned Upside Down*も、逆転世界による世俗風刺の一つのパターンとして、多くのチャップブックに引用された。

Kendrew版の*The World Turned Upside Down*(図3)が出版されたのは1820年頃とされているが、その少し前に、ロンドンで同タイトルの児童書が出版されている。当時、すでに子供向けの詩人として有名だったAnn Taylor(1782-1866)とJane Taylor(1783-1824)の姉妹による*Signor Topsy-Turvy's Wonderful Magic Lantern; or, The World Turned Upside Down*(London,



図2

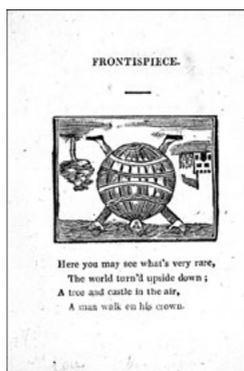


図3



図4

1810) (図4)である<sup>11)</sup>。これは、人々に親しまれていた *The World Turned Upside Down* を、改作して洗練された作品とすべく Tabart 社が制作したもので、24枚の銅版挿絵をつけ製本した豪華版として、2シリングと6ペンスという金額で販売された。通常、作者の名前が表に出ることのないチャップブックに有名な作家を起用した点、テキストをより洗練されたものに改めるよう依頼した点、木版よりも制作費がかさむ銅版を使用した点、そしてチャップブックの数十倍という価格で販売された点から、明らかに中産階級以上の読者を想定していることが分かる。こうした同時代・同タイトルの出版物と比べてみると、その体裁の簡素さや1ペニーという価格設定から、Kendrew 版のチャップブックがターゲットとした読者層が、労働者階級の庶民であったことは間違いないと言えるだろう。こうした読者層の違いが、風刺表現にどのような影響を与えるのかについては、第3章で取り上げる「埒外の人々」への風刺比較の中で詳述したい。

なお、逆転による風刺という手法そのものは、大陸ヨーロッパでも馴染み深く、ヒエロニムス・ボス (1450頃-1516, フランドル) やピーテル・ブリューゲル (1525頃-69, フランドル) などの絵画、さらにイタリアやドイツの民衆的印刷物にも散見されることが知られている<sup>12)</sup>。Kendrew 版のチャップブックでは、こうしたヨーロッパの伝統的流れを汲むものと、イングランド独自の性格を有するものが共存している。動物と人間の逆転、役割の逆転、食物連鎖の逆転などで描かれる全26場面のうち、当時のイングランド社会を色濃く反映した3場面について分析する。

## 2.2 恋川春町『無益委記(無題記)』江戸、天明元年(1781)

タイトルは、聖徳太子が世の行く末を予見して著したと伝えられる『未来記』のもじりである。角書きに「是は嘘木<sup>それ</sup> 夫は楠木」とあり、『太平記』において楠木正成が四天王寺にてこの『未来記』に見たて天下の行く末を予想する場面が、パロディのベースとなっている。この作品(図5)は、朋誠堂喜三二作『長生見度記』(天明3年/1783年)(図6)、森島中良作『従夫以来記』(天明4年/1784年)(図7)と合わせて「三未来記」と通称され、黄表紙の代表的な作者春町の作品のなかでもよく知られた作品の一つである<sup>13)</sup>。



図5『無益委記』



図6『長生見度記』



図7『従夫以来記』

この三未来記が出版された天明期は、老中・田沼意次（1719-88）による積極的な重商主義が取られた時代である。治世後半は、大飢饉（1782-87）や浅間山の噴火（1783）といった天災に見舞われ、社会不安と賄賂政治への批判により失脚したため、後世において悪政の象徴として風刺的とされてきたが、近年、その政治手腕や革新性への再評価がなされている<sup>14)</sup>。また、宝暦年間から続く田沼時代は、学問や芸術といった文化面からみると、新しい時代の幕開けでもあった。平賀源内（1728-80）による自然科学の発展や戯作文学の試み、医学面では、杉田玄白（1733-1817）と前野良沢（1723-1803）による『解体新書』（1774）の翻訳刊行、「金銀星」（アンタレス）の観測（1780）や浅草への天文台移設（1782）をはじめとする天文学への関心の高まりなど<sup>15)</sup>、近代科学への道筋が見え始めたのがこの時代だった。そうした新たな潮流の中で、荒唐無稽な未来予想を展開したこの作品群は、時代の流れをまさに捉えた戯作であったと言えないだろうか。

田沼時代が終わり、儉約を掲げて断行された寛政の改革によって、黄表紙の持つ批判精神が大きく変化したことは、多くの先行研究で論じられてきた通りである<sup>16)</sup>。改革直後の天明8年（1788）に出た、春町の『悦鼠眞蝦夷押領』や喜三二の『文武二道万石通』などは、社会への問題提起の意図が指摘されてきた。これに対し、『無益委記』で描かれているのはなんとも暢気な世界で、吉原や芝居をはじめとする江戸の都市文化を享受する人々の、いわば内輪への自虐的視線や他者への揶揄といった風刺は含まれているものの、そこに明

確な問題意識から生じる批判精神が読み取れるかと言えば、難しい。この点に留意しながら、分析を進めたい。

さて、『無益委記』では、初鱈売りが登場する最初の場面（図8）に添えられた「天びん棒上へ反る」という表現から、この先あべこべな世界が繰り返されることを、読者は予想することができる。12月の初鱈から始まり、当世風ファッション、流行の鼠色専門の洗張り屋、四ツ手駕籠ならぬ四ツ手車、寒くて暑い夏、坊主の吉原通いと蛸食、大門の松、盆と正月、遊女による客の選別、江戸節以上に流行する上代音楽、遊女の文武奨励、猫と杓子の芸者など、全17場面の中から、特に当世風俗や江戸の人々に対するまなざしが窺える3場面を取り上げる。



図8

### 3 風刺の対象と手法

#### 3.1 当世風ファッション

まずは、流行ファッションを用いた場面の比較をしてみたい。A sow with a parasol（日傘をさす雌豚）（図9）は、見るからに風刺的だが、この時代のイングランドにおける日傘は、階級差別の象徴的アイテムとして捉えることができる。つまり、同じ傘でも貧しい者は雨傘を使い、富める者は日傘を使ったのである<sup>17)</sup>。18世紀末のロンドンで上演され人気を博した、奴隷制を批判したパントマイム *Harlequin Mungo, or a Peep Into the Tower*（William Bates, 1787）の中でも、農園管理者と奴隷たちの関係を物語る象徴的な場面に、日傘が使われている。フランス由来のアイテムであることも、もちろん重要なポイントだ。イングランドにおいて、フランスかぶれは常に風刺的となったからである。また、豚は、フランス革命を機にした、当時の風刺合戦において、旧体制派と急進派、どちらの攻撃にも用いられた動物であった。テキストに「lady」

とあることから、この場面は上流階級への当て擦りと解釈できるだろう。

一方、春町の方は、誇張表現によって流行風俗を茶化している<sup>18)</sup> (図 10)。まず目に入るのは、釣竿のように細長い髷の先端である。春町が挿絵を描いた『当世風俗通』(安永2年/1773年)にも8種類の本田髷が紹介されているが、髷をここまで突き出すのは過度である。また、長いのが流行とはいえ引きずるほどの羽織、踵へ届く長い紐、幅の狭い帯の流行に対し据風呂のたがほどもある幅広の帯など、太平の世で爛熟した文化を大いに楽しむ通人たちの様子が大袈裟に描かれている。

どちらも流行ファッションをうまく用いた風刺表現である。しかし、春町の描く能天気な通人たちの様子からは、成熟した江戸の文化への誇りも感じられないだろうか。洒落本を書いた作者春町自身、ちゃかしの対象となった通人たちの側にいる。一方、文化的アイデンティティという視点からみれば、イングランドでは、ノルマンコンクエスト以降、フランスへの執拗な反発と憧憬から生まれた「フランスかぶれ」への愛憎が付き纏った。そのことの端的な表象となっているのが、このパラソルをもつ豚の図だった。それに対し、

江戸の人々には、上方から自立して、自分たちの文化を確立したことを誇るようになる、いわゆる「<sup>ぶんうんとうぜん</sup>文運東漸」の時代、当世の流行の謳歌が前面に出ている場面となっている。

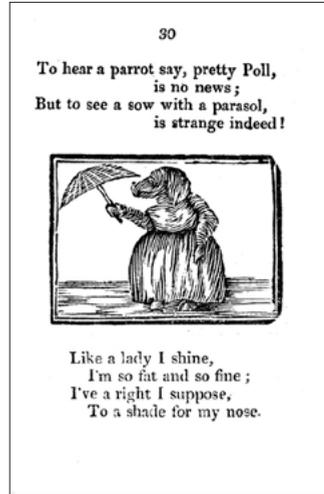


図 9



図 10

### 3.2 知識と芸

次に取り上げる、A dog playing the flute(フルートを吹く犬)(図11)は、チャップブックではお馴染みのキャラクターで、人間のような芸当をやっている犬のことである。実際、Kendrewも*The World Turned Upside Down* を出版する前に、この芸達者な犬を主人公とした*The Comic Adventures of Old Mother Hubbard and Her Dog* というタイトルのチャップブックを出版しており(初出は1805年のHarris版とされ、Kendrew版はその海賊版)、その際に使用した版木をこちらでも再利用している<sup>19)</sup>。「マザー・ハバードと犬」は、いわゆる買い物尽くしの14連詩であり、その第7連がこの場面の原詩となっている。



図 11

She went to the fruiterer's  
To buy him some fruit;  
But when she came back  
He was playing the flute.<sup>20)</sup>

Opie 夫妻の辞典によれば、この唄は、Harris の初版が、数ヶ月のうちに10,000部以上を売り上げるほどの人気で、海賊版を含め多くの出版者から出されたという。つまり、この場面を見た読者は、すぐに上記のパロディであることに気がついただろう。これは、Kendrew が商業的な戦略から人気のあるキャラクターを取り込んだとも解釈できるが、多くの読者にお馴染みのマザー・ハバードの犬を、さかさま世界という風刺の世界へ持ち込んだ点に意味があると考えられないだろうか。

当時のイングランドでは、学識や上流ぶった振る舞いが鼻につく知識人に対する風刺として、知識や芸を習得したいいわゆる「学者動物 (learned

animal)』<sup>21)</sup>を描くことが流行していた。また、科学や道徳が重視され始めた時代において、非科学的な迷信や悪習と同様に、旧時代に属するものの表象として芸達者な動物が使用されることもあった。これらの「特殊な能力を備えた動物たちが、似非科学的な興味のもとで記録に登場するようになるのは、1760年代以降のことである」<sup>22)</sup>り、次第に革命論争に利用されるようになる。本章第1節で述べた豚を用いた急進派と保守派の風刺合戦は、この学者動物の流れを汲んだものである。19世紀初頭には、これらの学者動物たちの主戦場は政治的なパンフレットからチャップブックや児童書へと移っていく。「マザー・ハバードと犬」は、こうした後期の学者動物の一つとされる<sup>23)</sup>。また、18世紀後半から19世紀前半にかけては、中産階級を中心に道徳主義運動が高まった時期でもあった。彼らの主張には、動物に芸を仕込むことも動物虐待の一種であるという動物愛護論も含まれていた。動物愛護運動は、Kendrew 版の *The World Turned Upside Down* が出たとされる 1820年代頃から急激に高まり、1822年には虐待防止令が制定された<sup>24)</sup>。学者動物の流行と動物愛護運動の変遷については、『マザー・ゲースとイギリス近代』（鶴見良次、2005）や『動物への配慮』（ジェイムズ・ターナー、斎藤九一訳、1994）などに詳しいが、ここでは社会階級による視線の差異に注目したい。

前章第1節で取り上げた Taylor 姉妹は、同時期に子供向けの挿絵入りロンドン案内 *City Scenes; or A Peep into London, for Children* を手掛けている<sup>25)</sup>。農場経営者である Clodpole がロンドン見学を訪れるところから始まるこのガイドブックは、1809年に初版が出され、以後、内容を刷新しながら版を重ねた。1818年版や1828年版には、動物に芸をさせる *The Dancing Bear and Dogs*（踊る熊と犬）という項目がある。Clodpole は、ポーランドやロシアから連れてこられた熊が、芸を仕込まれる (learned) のは悲惨なこと (misery) であり、かわいそうな犬 (poor dogs) がその日の仕事を終える頃にはくたくただらうと嘆いた後、かわいそうな動物を虐めるためにお金を払うよりも大道芸人に職の斡旋をしてやりたい、と締め括っている<sup>26)</sup>。これこそが、道徳主義を標榜する中産階級の人々が労働者階級の人々へ向けた眼差しであろう。Taylor 姉妹の作品の読者層が中産階級の子供たちであったことは、すでに述べた通りである。

こうした社会変革の動きに対し、労働者階級の人々の視点で Kendrew のさかさま世界に取り込まれた「フルートを吹く犬」を見てみると、単に役割が逆転した人間と動物という構図だけではない風刺の意図を読み取れないだろうか。つまり、調教された学者動物として、動物虐待を批判する教養主義者を描いたとも解釈できる。

一方、春町が描く遊廓の一間（図12）では、皆が眠そうな面差しで演奏を聴いている。洗練された江戸浄瑠璃である河東節以上に先端をゆくものとして、古代の神楽や平安時代の歌謡である催馬楽さいばらが流行るさまを描き、国学者の賀茂真淵まぶちが傾倒し江戸でも共鳴者が出た古代志向を冷やかしている。春町は、武士や町人の行き過ぎた遊芸の稽古などを風刺した『高慢齋行脚日記』こうまんさいあんぎやにつき（安永5年）の中でも、義太夫節や豊後節と並列して河東節を取り上げている<sup>27</sup>）。神楽や催馬楽がそれ以上の流行となるというのである。

両者のテキストを見てみると、フルート演奏の「Too, too, too, too」は音色の「tone」と、行き過ぎや極端であることを示す「too-too」との掛詞と解釈できるだろう。催馬楽に至っては、「ご法事に合うよふ」と評されている。こちらは静けさが過ぎているようだ。行き過ぎた行為に冷やかな視線を向ける



図12

という発想が両者に共通している。

しかし、これらの行き過ぎた行為の担い手である風刺対象と読者との関係に目を向けると、その視線の温度差に気がつく。イギリスでは、19世紀前半、動物愛護の機運が高まり、フェアや街路で見世物を行っていた大道芸人たちがその標的とされたことはすでに述べた通りである。彼らは、生活の糧のため犬に芸を仕込んだ。その彼らに対し、道徳主義者たちは教養を仕込み、職を変えさせようとした。それを踏まえてこのような見方はできないだろうか。ここに描かれているのは子供にもお馴染みのマザー・ハバードの犬だが、道徳主義者達を犬に見立てて芸を披露させ、彼らが大道芸人たちに職業の転換を迫ったように、芸の象徴であるフルートを「I'll give it to you」と言って手放させようとしている、と。そう解釈するならば、流行とはいえ実は退屈な催馬楽を眠ってやり過ごそうとする春町の態度は穏便である。

### 3.3 埜外の人々

最後に取り上げるのは、読者コミュニティの埜外の存在として描かれたユダヤ人と田舎武士である。ここからは、共同体における他者の問題を考えることができると思われる。

怪しげな出で立ちとドイツ訛りの英語で古着の呼売りをして回ったユダヤ人は、イングランド人及びキリスト教徒が持つ通俗性の外にいる人々である。イングランドにおけるユダヤ人の歴史は古く、時代や階層によってその在り方や受容は異なる。しかし、常に、キリスト教的世界において異質な存在として見なされていたことが、文学の中の描写からもうかがえる。たとえば、William Shakespeare (1564-1616) の『ベニスの商人』(*The Merchant of Venice*, 1594-97) に登場する高利貸シャイロックや、Charles Dickens (1812-70) の『オリヴァー・ツイスト』(*Oliver Twist*, 1838) に登場する少年達を束ねてスリや窃盗団を組織するフェイギンなどである。また、ヴィクトリア朝で2期にわたって首相を務めたユダヤ系イギリス人である Benjamin Disraeli (1804-81) の街頭演説では、「シャイロック」や「古着」といった野次が飛んだとされる<sup>28)</sup>。ここでは、ロンドンの街頭で呼売りをするユダヤ商人、特に古着商人にスポットを当てて考察してみたい。

18世紀後半から19世紀初頭にかけてロンドンに居住したユダヤ人は、その多くがドイツからの移民であった<sup>29)</sup>。18世紀半ば以降、プロイセンやドイツ諸連邦では、下層ユダヤ人に対する居住や営業の権利譲渡を一切禁じる法が打ち出された。大陸ヨーロッパでユダヤ人排斥の動きが高まる中、オーストリアで発令されたボヘミア全土からのユダヤ人追放令(1744)を撤回させた(1748)のがイギリス政府だった。この、一見人道的な干渉外交の裏には、上層ユダヤ人によるイギリス政府への資金の貸付という事情があった。難民となったドイツ系下層ユダヤ人が、オランダ経由でロンドンに流入したのは、こうした事情からである。彼らは、すでにイギリス社会に同化しつつあった上層ユダヤ人とは異なる貧民問題をイギリス社会へ持ち込むこととなった。自己資金が乏しく、社会保障制度の適用外とされた彼らが選択できた唯一の職業が行商、特に古着商であった。しかし、古着の取引には盗品が混ざることも多く、結果的にユダヤ人古着商は盗品買取業者と見なされるようになったのである。さらに、1771年に起きた8人のユダヤ人窃盗団によるチェルシー強盗殺人事件は、ロンドン市民の反ユダヤ感情を決定的なものにした。

『ロンドンの労働とロンドンの貧民』(*London labour and the London poor*, 1851)で知られるHenry Mayhew(1812-87)は、同書の中で、ユダヤ人の古着商人は少なくとも800人から1,000人は存在したと述べている。彼らの多くはイーストエンド、特に古着市があったベティコート・レインに居を構え、その生活ぶりは、リージェンツ・パークやピカデリーに邸宅を構える上層ユダヤ人たちとは大きく異なっていた<sup>30)</sup>。

こうしたユダヤ人の古着商人の出で立ちについては、18世紀から19世紀にかけて多数出版された、*Cries of London* というタイトルのチャップブックや絵本で確認することができる。これは、街頭で呼売りをする商人たちを、1ページごとに挿絵とテキストで紹介したカタログのようなものである。こうした行商人カタログの中に、古着を売るユダヤ人も紹介されており、まさにKendrewのチャップブック(図13)にあるように、赤髭をたくわえ、ステッキ・大きなずだ袋を携えている。ヤギの表象は、彼らに同情的な視点で見ればスケープゴート、否定的な視点で見れば「unpleasant」を意味する「old goat」と捉えられるだろうか。テキストの一行目で、靴の修理屋を引き合いに出し

ているのは、イギリスをはじめ多くのヨーロッパ諸国に伝わる、キリスト磔刑の道中で野次を飛ばした靴屋のユダヤ人アハスエルスに端を発する「さまよえるユダヤ人」の伝説<sup>31)</sup>に由来しているのだろう。

一方『無益委記』に目を転ずると、世情や人情の機微を解さない無粋な野暮として描写される田舎武士も、黄表紙の作者・読者層が共有した通人文化の外に置かれた存在と言える。鳥居清長画『化物箱根先』（安永7年）の冒頭にもあるように、「野暮と化物は箱根から先」という言葉から、野暮が成熟した江戸の文化に似つかわしくない存在として揶揄の対象とされ

ていたことが分かる<sup>32)</sup>。また、野暮を冠とした作品では岸田杜芳作・北尾政美画『狂言好野暮大名』（天明4年）がある<sup>33)</sup>。真面目で世間知らずな若殿様が、名君たらんとして施薬を思いつくが、無知のあまり閨房薬と同じ名前をつけようとしたり、家来の勧めで通人を真似て歌舞伎に傾倒するあまり、何事も歌舞伎の調子で行うという行き過ぎた行動に出たりと、善人だが野暮ったい様が滑稽に描かれている。しかし、主人公・馬之助へのまなざしは、真面目さと善意ゆえのとんちんかんな空回りという、どこか好意的な笑いも感じられる。

では、ここで春町が描いた野暮と遊女の逆転の立場の場面はどうだろうか（図14）。遊女に背を向け、片袖を抜き、ふんぞり返って煙管をのむ野暮は、いかにも得意げな様子である。時代遅れの髪型に、浅黄裏を身につけ、「国やしきで、いかにいやしいつとめのおらだとても」などとお国訛りで言うさまは、取り扱いに困るという点で見れば、まさに野暮そのものと言えるだろう。野暮は野暮のまま、反転させることによって大通へと格上げされて描かれているのである。また、「あさぎ裏ふたゝび世にいつる」というテキストからは、江戸が文化の中心になる前の時代への視野が感じられる。当代の江戸の都市文化の対極にある野暮を面白おかしく描くことで、洗練された江戸文化の誇示へと帰結していると言える。



図 13

きしだとほう

けいぼう



図 14

両作で描かれた、ユダヤ人と野暮の決定的な違いは、両者に対する周囲の眼差しの違いに由来しているように思われる。下層ユダヤ人がイングランドに持ち込んだ貧困問題は、ヨーロッパ全体の社会問題の一部であったが、チャップブックの読者層にとっては、排除すべき他者だったのだろう。日曜学校へ通った子供読者にしても、平日は物売りに勤しむ労働者階級の子供たちがほとんどであるから、彼らから見れば厄介な競合相手であった。一方、田舎武士は通人文化や江戸人の埒外にいる面倒な存在ではあるものの、彼らには国許があり、帰るべき場所があった。また、階級的には上位に位置付けられ、社会で認められた存在であった。つまり、彼らは読者たちの日常を脅かすような存在ではなく、実際、自身は江戸詰ではあるものの駿河國小嶋藩士であった作者春町にとっても、身近な存在だったと言えるだろう。その違いが、「old goat」(不愉快なヤギ)へと貶められたユダヤ人の古着商人と、大通へと持ち上げられた野暮という描写の違いに表れているのではないだろうか。

### 3.4 まとめ - 読者の眼差しと風刺の矛先 -

Kendrew と春町が描いたさかさまの世界を通して、両国に満ちていたナン

センスとユーモアによる風刺のムードをみてきた。風刺対象への眼差しにおいて、両者には微妙な差異がみられる。前者が、社会への不満や変革への希望をナンセンスで包んだのに対し、成熟した都市文化を戯譚に包んで謳歌したのが後者と言えるだろう。予言物の体を取りつつ、Kendrew のさかさま世界には「過去」からの変化の在りようや期待を、春町のあべこべ世界には「今」の享受を感じることができる。

チャップブックと黄表紙の風刺表現の差異は、両者の作者及び読者層の社会への眼差しの違いとも関連づけられるだろう。チャップブックには出版者の記載はあるが、作者や画工の記載はない。そのほとんどが、中世ロマンスやナーサリータイムを下敷きとし時事や流行と結びつけたパロディーや、中産階級向けの連載小説・古典文学のダイジェストといった内容で、特に独創性のないものだったからだ。それらは、クラブストリートと呼ばれる三文文士街の屋根裏で、名もなきハックライターたちによって書かれたものである<sup>34)</sup>。彼らの中で後世に名を残したのは、『ウェイクフィールドの牧師』(*The Vicar of Wakefield*, 1766) を著した Oliver Goldsmith (1730-74) くらいであろう。また、読者層については、先述した通り、新聞や書籍を買い求めることが難しい労働者階級の人々が中心だった。一部には、『サミュエル・ジョンソン伝』(*The Life of Samuel Johnson*, 1791) で知られる James Boswell (1740-95) や、ナーサリータイム研究で有名な James Orchard Halliwell (1820-89) など知識人の熱狂的コレクターがいたことは事実だが<sup>35)</sup>、出版者のターゲットはあくまで庶民であった。それは、新聞に対する課税法が施行された 18 世紀から、撤廃される 19 世紀半ばまでの期間に、チャップブックの流行と衰退が重なっていることから明らかである。チャップブックは、大衆に読書習慣と批判的視点を浸透させ、以後、*PUNCH* (1841 創刊) などの挿絵入り定期刊行物へと、その風刺精神は引き継がれてゆく。

一方、黄表紙には作者及び画工の趣向や独創性が大いに反映されている。昔話や芝居などで知られた古い時代の武者の物語などの焼き直しが多かった黒本青本との違いの一つは、こうした独創性が備わった点である。作者のユニークな発想や時局を突く鋭い穿ちの視点が、大人の読者、とりわけ知識層に響いたと言える。作者の独創性は、作品が持つ批判精神の在りようにも直結して

いる。先述したように、寛政の改革以前の黄表紙では、内輪の通人文化や江戸市民の生活といった流行風俗を滑稽に描くことに主眼が置かれ、社会全体としての問題意識や政治的批判精神はあまり感じられない。春町の作品でも、上方の文化や前時代的なもの、通人文化の外にいる人々などに対する揶揄や冷やかしは見受けられるが、それらは害悪とされ排除されるべきものとしては描かれていない。この姿勢は、武士であった喜三二や春町だけでなく、町人の岸田きしだとほう杜芳(?-1788)の野暮に対する描き方においても共通している。つまり、黄表紙の作者及び画工、そして読者は、文壇の構成員であれ市井の人々であれ、成熟した江戸文化を享受している層であった。今回取り上げた逆転世界の趣向も、太平の世をひっくり返すような意図はなかったであろう。ナンセンスとユーモアに溢れた両作品であるが、帝国内外の移民問題をはらんだ重層的な貧困問題に直面する都市労働者に向けた逆転世界と、自分たちの手で確立した江戸文化を謳歌する人々によって描かれた逆転世界とでは、社会に向けた風刺精神が異なるのは当然と言えるかもしれない。

民衆の批判精神を表した風刺文芸というと、中世以降興隆し江戸期において流行した落書もその一つとされる。落書は「匿名による社会批判、政治批判、世相批判であり、「諷刺で包んだ批判」である<sup>36)</sup>。匿名ではあるが、言葉遊びによる風刺という性質上、作者にはある程度の教養が備わっていたと考えられる。そのため、近世の落書は、幕府直参の下級武士、あるいは諸藩の浪人、富裕な町人などによって作られたのではないかとされている。いくつかの先行研究でも指摘される通り、こうした体制側に属していた人々によってなされる社会批判が、大規模な社会変革を促す原動力になり得なかったのは当然であろう。鈴木棠三氏は『落書類聚』の概説において、「近世の落書が、何やら投げやりで、無気力なのはそのためであろう。かれらは決して行動派ではなかった」と述べている。このような作者側の姿勢は、春町をはじめとした黄表紙の戯作者たちにも通じるところではないだろうか。

落書における日本的な風刺について、紀田順一郎氏は『日本人の諷刺精神』(1980)の中でイギリスと比較しながら下記のように分析している<sup>37)</sup>。

通念や慣用の言い廻しを利用して、主題を転化する技巧はわが国の落書

の常套手段です。そうした技巧に最もつごうがよかったのは、和歌という単純な詩形式の発達と、同音異義に富む日本語の特性でした。むろん、こうした材料を語戯として発達させたものは国民性というものです。短く才気のある笑い、機知というよりは頓知、風刺というより揶揄、厳粛な笑いより軽妙なおどけを好む傾向は、現在でも同じことで、英国型の抑制されたまわりくどい、重鈍な笑い是一般性を持たないのです。

しかし、少なくともチャップブックで用いられる風刺表現は、押韻による言葉遊びを前提とした軽妙なテキストで構成されており、「重鈍な笑い」ではない。日英の風刺精神の違いは、技巧的な部分よりもむしろ、そうした軽やかな体裁に包まれた内実の方にあるのではないだろうか。つまり、現状維持を前提とした穿ちと、変革への衝動を孕んだ批判の目、という違いである。

#### 4 おわりに

以上のことから、チャップブックと黄表紙における批判精神のあり方の違いは、風刺の先にある問題解決への姿勢の違いであると結論づけたい。それは、風刺対象との距離の違いとも言い換えられる。

チャップブックの主な読者層であるイングランドの都市労働者たちは、対象へ忌憚のない悪意をぶつけることに憚りはなかつただろう。そして、その先に現状の打破や権力者の転覆を夢見たかもしれない。彼らに明確な政治意識があったのかどうかという点には、まだ調査が必要である。実際、イングランドで都市労働者の政治参加が認められるのは、第二回選挙法改正（1867）まで待たねばならない。しかし、ピューリタン革命と王政復古という激変の時代における体制批判を担った、17世紀のバラッドに端を発するチャップブックである。痛烈な風刺性は、そのまま社会への問題意識と捉えて良いだろう。

これに対し、小藩といえどもその重臣として政治の側にあった春町にとって、揶揄の対象とした、度を越した通人や古代思想の学者、無粋な田舎武士などは、決して無関係な存在ではなかつただろう。知人や同僚、あるいは上司、時には春町自身がその対象として当てはまるのではないか。春町の親しい知

人であった喜三二や中良は、『無益委記』から間を置かず未来記ものを著している。当然、春町は、自身の周囲でも読まれることを想定して、これを執筆していたはずだ。作者と読者、そして登場キャラクターの距離が非常に近いのである。武士階級の知識人、つまり当代の政治及び文化の担い手による、趣向の面白さや新奇性に主眼を置いた風刺には、積極的な社会変動を促す攻撃性は認められないだろう。

両者の風刺の対象と手法について、主にその制作者である作者と、それを受容する読者という視点から比較してきた。風刺とは、その社会や時代あるいは個人に対する批判の表現である。幕末明治以降、日本においても挿絵入り定期刊行物の刊行が相次ぎ、野村文夫（1836-91）が創刊した『团团珍聞』などは、先述の *PUNCH* から影響を受けたとされる。1862年には、横浜の居留地で *JAPAN PUNCH* の発行も始まる。近代以降、日本の風刺挿絵やジャーナリズムは英国のそれから強い影響を受けながら、自由民権運動へと結びつき大きくなるとなる。しかし、その手前で育まれた風刺や批判精神の眼差しの差異を考えたとき、社会的階級という問題が浮かび上がってくる。武士であった野村によって創刊され藩閥政治批判を行った『团团珍聞』と、「階級的安定とはおよそ無縁の面々」<sup>38)</sup>によって創刊され政治批判を行った *PUNCH* の風刺表現の検証については、今後の課題としたい。近代以降のジャーナリズムに繋がる風刺の土壌を捉えるとき、同時代的に流布した共通点の多い小さな出版物を比較することで、両国における批判精神の在り方の端緒を掴めるのではないだろうか。

## 註

- 1) ヨークの出版者。チャップブックには作者の記載がないものが多いため、出版者名を先頭に記す。
- 2) 書名について、諸年表や春町自身による序文では『無益委記』、袋入題簽には『無題記』と記されている。(棚橋正博『日本書誌学体系 48 黄表紙総覧前編』青裳堂書店、1986、p.282)。
- 3) John Bull の章より。
- 4) Leon M. Zolbrod, *KUSAZOSHI: Chapbooks of Japan*, Transactions of the Asiatic Society of Japan, 1968, p.116.
- 5) Laura Moretti, *Recasting the Past: An Early Modern Tales of Ise for Children*, Leiden, 2016, p.9.
- 6) M. Lauron, *The Cries and Habits of the City of London*, London, 1709.

- 7) Roger Thompson, *Samuel Pepys' Penny Merriments*, London, Constable, 1976, index より。
- 8) Roger Davis, *Kendrew of York and his chapbooks for children with a checklist*, Leeds, The Elemete Press, 1988, p.25.
- 9) 小林章夫『チャップブック - 近代イギリスの大衆文化 -』駈々堂出版、1988、pp.16-18.
- 10) British Library; <https://www.bl.uk/collection-guides/thomason-tracts>
- 11) British Library; <https://www.bl.uk/collection-items/signor-topsy-turvys-wonderful-magic-lantern-or-the-world-turned-upside-down>
- 12) カンズル、デイヴィッド著、岩崎宗治訳「さかさま世界 - ヨーロッパにおける瓦版の一類型とその図像学 -」『さかさまの世界』岩波書店、1984、pp.67-90.
- 13) 小池正胤・宇田敏彦・中山右尚・棚橋正博編『江戸の戯作絵本 (一)』社会思想社、1980、p.114.
- 14) 藤田覚『田沼意次 - 御不審を蒙ること、身に覚えなし -』ミネルヴァ書房、2007の他、いくつかの先行研究で指摘されている。
- 15) 小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』集英社インターナショナル、2019、pp.65-66.
- 16) 竹内誠「寛政の改革」『寛政の出版界と山東京伝』たばこと塩の博物館、1995 など。
- 17) クロフォード、T.S. 著、別宮貞徳・中尾ゆかり・殿村直子訳『アンブレラ - 傘の文化史 -』八坂書房、2002、pp.165-179.
- 18) 浜田義一郎校注『日本古典文学全集 46 - 黄表紙・川柳・狂歌 -』小学館、1971、p.71.
- 19) Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed. Oxford, Oxford University Press, 1951, p.377.
- 20) Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed. Oxford, Oxford University Press, 1951, p.376.
- 21) 鶴見良次『マザー・グースとイギリス近代』岩波書店、2005、pp.113-166.
- 22) 前掲、2005、p.114.
- 23) 前掲、2005、pp.146-162.
- 24) ターナー、ジェイムズ著、斎藤九一訳『動物への配慮』法政大学出版局、1994、pp.68-69.
- 25) British Library; <https://www.bl.uk/collection-items/city-scenes-or-a-peep-into-london>
- 26) The Project Gutenberg eBook; <https://www.gutenberg.org/files/38612/38612-h/38612-h.htm>
- 27) 水野稔校注『日本古典文学大系 59 黄表紙・洒落本集』岩波書店、1958。
- 28) パターソン、マイケル著、山本史郎監訳『ディケンズのロンドン案内』原書房、2010、pp.68-81.
- 29) 佐藤唯行『英国ユダヤ人』講談社、1995、pp.182-195.
- 30) メイヒュー、ヘンリー著、松村昌家・新野緑編訳「第 6 章 ユダヤ人街頭商人」『ヴィクトリア朝ロンドンの下層社会』ミネルヴァ書房、2009、pp.115-132.
- 31) John Ashton, *Chap-books of the Eighteenth Century*, London, Chatto and Windus, 1882, pp.28-29.
- 32) カバット、アダム「「箱根の先」という異界 - 黄表紙における化物像 -」『日本文学』50 卷 10 号』2001、pp.34-44.
- 33) 小池正胤・宇田敏彦・中山右尚・棚橋正博編『江戸の戯作絵本 (二)』社会思想社、1981、pp.98-132.
- 34) コリンズ、A.S. 著、青木健・榎本洋訳『十八世紀イギリス出版文化史 - 作家・パトロン・書籍商・読者 -』彩流社、1994、pp.39-46.

- 35) Victor E. Neuburg, *The Penny Histories*, New York, 1969, pp.1-3.  
 36) 鈴木棠三『江戸時代 落書類聚 上巻』東京堂出版、1984、pp.9-18.  
 37) 紀田順一郎『日本人の諷刺精神 - 落書とその時代背景 -』蝸牛社、1980、p.25.  
 38) 松村昌家『『パンチ』素描集 - 19世紀のロンドン -』岩波書店、1994、p.247.

#### 画像出典

- 図 1: John Ashton, *Chap-books of the Eighteenth Century*, London, Chatto and Windus, 1882  
<https://publicdomainreview.org/collection/chapbooks-of-the-eighteenth-century-1882>
- 図 2: British Library;  
<http://www.bl.uk/learning/images/uk/crown/large2180.html>
- 図 3,9,11,13: McGill Library's Chapbook Collection;  
<http://digital.library.mcgill.ca/chapbooks/fullrecord.php?ID=7458>
- 図 4: British Library;  
<https://www.bl.uk/collection-items/signor-topsy-turvys-wonderful-magic-lantern-or-the-world-turned-upside-down>
- 図 5,8,10,12,14: 国立国会図書館デジタルコレクション； <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892493>
- 図 6: 国立国会図書館デジタルコレクション； <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892494>
- 図 7: 国立国会図書館デジタルコレクション； <https://dl.ndl.go.jp/info:ndljp/pid/9892490>

#### 参考文献

- Iona and Peter Opie, *The Oxford Dictionary of Nursery Rhymes*, 2nd ed. Oxford, Oxford University Press, 1951.  
 John Ashton, *Chap-books of the Eighteenth Century*, London, Chatto and Windus, 1882.  
 Laura Moretti, *Recasting the Past: An Early Modern Tales of Ise for Children*, Leiden, 2016 (序文).  
 Leon M. Zolbrod, *KUSAZOSHI: Chapbooks of Japan*, Transactions of the Asiatic Society of Japan, 1968.  
 Roger Davis, *Kendrew of York and his chapbooks for children with a checklist*, Leeds, The Elemete Press, 1988.  
 Victor E. Neuburg, *The Penny Histories*, New York, 1969.  
 石上敏校訂『森島中良集』国書刊行会、1994。  
 大石慎三郎『田沼意次の時代』岩波書店、1991。  
 カバット、アダム「「箱根の先」という異界 - 黄表紙における化物像 -」『日本文学 50 巻 10 号』2001、pp.34-44。  
 カンズル、デイヴィッド著、岩崎宗治訳「さかさま世界 - ヨーロッパにおける瓦版の一類型とその図像学 -」『さかさまの世界』岩波書店、1984。  
 クロフォード、T.S. 著、別宮貞徳・中尾ゆかり・殿村直子訳『アンブレラ - 傘の文化史 -』八坂書房、2002。  
 小池正胤・宇田敏彦・中山右尚・棚橋正博編『江戸の戯作絵本 (一)』社会思想社、1980。  
 小池正胤・宇田敏彦・中山右尚・棚橋正博編『江戸の戯作絵本 (二)』社会思想社、1981。  
 小林章夫『チャップブック - 近代イギリスの大衆文化 -』駈々堂出版、1988。

- 小林ふみ子『へんちくりん江戸挿絵本』集英社インターナショナル、2019.
- コリンズ, A.S. 著、青木健・榎本洋訳『十八世紀イギリス出版文化史 - 作家・パトロン・書籍商・読者-』彩流社、1994.
- 佐藤唯行『英国ユダヤ人』講談社、1995.
- 佐藤至子『江戸の出版統制 - 弾圧に翻弄された戯作者たち-』吉川弘文館、2017.
- 清水一嘉「チャップブックと十八世紀英国における読者層の拡大」『文學論叢 42』愛知大学人文社会学研究所、1970、pp.87-112.
- 清水一嘉『英国の出版文化史 - 書物の庇護者たち-』勉誠出版、2019.
- 竹内 誠「寛政の改革」『寛政の出版界と山東京伝』たばこと塩の博物館、1995.
- ターナー、ジェイムズ著、斎藤九一訳『動物への配慮』法政大学出版局、1994.
- 棚橋正博『日本書誌学大系 黄表紙総覧 前編』青裳堂書店、1986、pp.282-285.
- 鶴見良次『マザー・ゲースとイギリス近代』岩波書店、2005.
- 浜田義一郎・鈴木勝忠・水野稔校注『日本古典文学全集 46 - 黄表紙・川柳・狂歌-』小学館、1971.
- バターソン、マイケル著、山本史郎監訳『ディケンズのロンドン案内』原書房、2010.
- 藤田覚『田沼意次 - 御不審を蒙ること、身に覚えなし-』ミネルヴァ書房、2007.

&lt;ABSTRACT&gt;

**A Comparison of English Chapbooks and the *Kusazōshi*  
of Edo-period Japan:  
*The World Turned Upside Down and Mudaiki***

ŌSHIMA Yūki

In this article, I compare English chapbooks and the *kusazōshi*, especially *kibyōshi*, of Edo-period Japan. Chapbooks are small booklets, printed on a single sheet or a few sheets bound into booklets. They have crude woodcut illustrations, and circulated widely in 18th and 19th-century England. The bibliographic similarities between chapbooks and *kusazōshi* have been noted by Leon M. Zolbrod and Laura Moretti in their books, Zolbrod's *Kusazōshi: Chapbooks of Japan* and Moretti's *Recasting the Past: An Early Modern Tales of Ise for Children*. In order to further this discussion, I focus on the images of characters in the works, and attempt to clarify the similarities and differences in the expression of their satirical views of their respective societies.

I examine in detail the chapbook *The World Turned Upside Down, or, No News, and Strange News* by James Kendrew (York, c. 1820), and the *kibyōshi Mudaiki* by Koikawa Harumachi (Edo, 1781). I compare them in terms of the following elements: the material on which the parodies are based; the techniques used in producing caricature; and their readerships. A common feature is their use of nonsense. The stories feature familiar animals and certain groups of people, which would have been readily identified by their readers, and perhaps elicited certain prejudices. For example, Jews and rustic *samurai* are typical objects of satirical expression. In addition, pointed and witty satire, often involving role reversal, is employed to challenge contemporary fashions and social conditions. Although filled with nonsense, these books appealed to their urban readerships by skillfully manipulating

their common understanding of the world around them. The article finally examines differences in the critical attitudes and the objects of satire of the two countries, which can be identified despite the similarity of their satirical styles. These derive from differences in the view of society of their authors and their readerships. Chapbooks retain a cutting satirical quality characteristic of broadsides and political pamphlets that played a part in criticism of the establishment during the 17th-century Puritan Revolution and Restoration. In contrast, *kibyōshi* were written by intellectuals of the *samurai* class, members of both the political and cultural establishment, who, along with their citizen readers, valued a type of humor based on literary novelty and intricate word play. I conclude that the differences in their critical attitudes are based on their social status and their distance from the objects of their satire.